

人文探偵が切り拓く植民地期台湾文学の 新地平

星名宏修著
植民地を読む
〔歴日本人たちの肖像〕



四六判 318頁
法政大学出版局
〔本体3000円+税〕

八木 はるな

本書は、著者が現在まで一〇年余りに渡って蓄積した膨大な研究成果の一部をまとめたもので、主に植民地後期（一九三七～四五）の文学作品を対象に、それらのテクストが

持ち得る意味を、人類学や社会学、歴史学等の膨大な参考文献に依拠しながら考察している。著者は、これまでいわゆる「無名」に近かったマイナー内地人作家の作品群に焦点を当て、彼らが意識的・無意識的にテクスト内部に描き込まなかつた事実とその理由を、各時代における社会的コンテクストに照らし合わせながら考証していく。そうすることで、植民地支配の重層的実を浮かび上げらせ、支配者の心理構造を暴いていくのである。

台湾文学に馴染みのある読者にとっては、本書で扱われるのがマイナー作家ばかりであるからこそ、知的好奇心を掻き

立てられ、一気に読み進めてしまふことだろう。文学研究書としての本書の意義は、従来の台湾文学史に一石を投じ、植民地期台湾文学の新しい地平を切り拓いたことにある。

他方、文学を専門としない読者が本書を読めば、文学研究の方法的多様性を実感しうるかもしれない。考証的な批評を行う本書のような文学論は、同時に社会史論としても楽しむことができる。本書では、たとえば探偵小説の成立条件、台湾籍民と旅券の歴史、台湾ラジオ放送の沿革、理蕃政策とリズムとの関係などが、作品読解に先んじて解き明かされており、それらの論述から、台湾近代史、日本帝国史に関する知識を多く吸収することができる。

第一部で著者は「本物の「日本人」とは誰か」を考えつつ、次のようなことを解き明かす。まず、沖縄人と台湾人とは古

くから密接な関係を持ち、「内地人」とは重層的な意味を持つ言葉であったこと(第一章)。また、金閨丈夫「指紋」(一九四三)では台湾人が「司法的同一性」の「攪乱者」として描かれ、そのどんでん返しの結果に、生物学的な同一性しか信用しない人類学者金閨の辛辣な視線が織り込まれていたこと(第二章)。続く第四章では、混血児表象をめぐり、坂口襷子や庄司総一等著名な内地人作家に加え、本島人作家や朝鮮の文脈をも視野に入れた射程の広い議論がなされている。ここでは、当時日本社会に根強くあつた優生思想と台湾における皇民化・同化政策との複雑な重なりとズレが明らかにされ、その優生思想と皇民化・同化政策が絡み合ったところで生まれる支配者の論理が暴かれる。だがそうならば、第四章において唯一の被植民者である本島人作家の黄寶桃は、当時どのような思想をもって「感情」のような小説を発表したのか? 読者はさらなる論点を次々と連想することだろう。

第Ⅱ部は、内地人の原住民表象を再考するものである。著者はまず、一般に劇作家として知られる中山侑のラジオ作家時代に着目し、新たな中山像を浮かび上がらせていく。著者によれば、中山は「ラヂオ・ドラマ 風——ある蕃地の駐在所風景」(一九四〇)の中で、「いつ発生してもおかしくはない「蕃害」に対する統治者の潜在的な恐怖」を凶らずも描い

てしまっていたという(第五章、一五九―一六〇頁)。第六章は、河野慶彦「扁柏の蔭」(一九四三)について、作者が故意にテクストから排除した二〇年間の実態に迫るものである。さらにその論法は、台湾人の大陸進出を論じ、宗主国・植民地・占領地の力学を分析した第Ⅲ部の第七章にまで引き継がれ、同章では河野「湯わかし」(一九四三)をめぐり、同じく看護助手の大陸進出を描いた藍明谷「一個少女的死」(一九四六)を手がかりに、河野がテクストから排除したものが再び検証されていく(第七章)。それに対して第八章では、紺谷淑藻郎「海口印象記」(一九四二)が、先行テクストの火野葦平「海南島記」(一九三九)を超えるようにして、「火野とは全く異なる占領地の姿を描いた」ことが評価される。同作には「台湾で促進されている皇民化政策の「成果」や「日本の「大陸進出」のありのまま」が描き込まれていたこと(二四四―二四五頁)、それは楊達が評価した「糞リアリズム」の系譜にあったことを、著者は明らかにしている。

第Ⅳ部・第九章は、一九三五年四月の新竹・台中大震災をもとに作られた「君が代少年」という美談を論じたものだ。著者は、それが映画や唱歌、ラジオ教材といったメディアミックスによって「国民化」されていったという事実を暴き出す。しかしその状況は、原住民少女版美談とも言えるあの「サ

「ヨンの鐘」を容易に連想させるものでもあるがゆえに、両作の対照性にも言及すれば、いま以上に興味深い論考になったのではないかと評者は思う。本章の「おわりに」は、著者による「柴山武矩論序説」とでも呼べようか、著者の次回作を匂わせる一つの予告編となっており、そうした味わい深い余韻を残しながら、本書は結ばれている。

「作者自身も想定していなかったであろう謎を読み解くための参加の記録」(四六頁)という著者の表現は、まさに本書全体の特徴を的確に表す言葉でもあったように思う。本書が行う作品のコンテクスト分析は、ともすると気が滅入りそうなど深遠で仔細なものだが、それをくぐり抜けて最後に提示される著者の作品解釈は、強い説得力に満ちている。考察対象から常に一定の距離を置き、対象に鋭く切り込んでいく——そうした著者の冷静な批評態度が、本書では効果的に現れているのだ。評者は緊張感を覚えつつこれを読み進めながら、まるで「人文探偵」による一冊の事件簿を読むかのような印象を受けたのである。

第一章の最後に著者は、台湾と特に関わりの深かった八重山の人々について次のように述べている。「「あこがれの台湾での生活」は、故郷では体験できない都会的な「楽しさ」を満喫できる場であり、その意味で「植民地は天国だった」。

だが同時に植民地での日常を通じて、植民者の帝国意識に八重山の人々も深く絡めとられることになった」(三一頁)。だが、当時の沖縄台湾間に就航していた航による旅が「地獄のような旅」(又吉盛清「日本植民地下の台湾と沖縄」沖縄あき書房、一九九〇年、三八頁)に例えられるほど劣悪であったことを考えると、八重山の女性たちの渡台の動機には、都会的でファッショナブルな生活、いわば「近代」への「あこがれ」だけでなく、「地獄のような旅」を経験してでも台湾で稼がねばならぬ経済的事情があったことを見過ごしてはならないだろう。「台湾植民地では、多くの沖縄女性が、貸座敷や料亭、遊郭に囲われ、なぐさみものにされていた。沖縄女性も、また、台湾植民地支配の先兵として、「肉体市場」をもって、植民地支配を支える道具にされていた」(同上書、六七頁)。こうした視点は、本書のテーマからは外れるのだろうが、それでもやはり著者は、沖縄人女性の渡台動機を「あこがれ」の一点のみに集約しすぎてしまっているように、評者には感じられる。だが、そうした懸念も含めて、評者は特に第一章を興味深く読み進めた。たとえばここでは、葉石壽「異族的婚礼」(一九九四)と黄昆彬「琉球的孩子們」(一九四八)とが比較され、両テクストの深い関連性が指摘されているが、その指摘から台湾人作家は現在や過去の沖縄人をどのように表象して

きたか、という新たな問題意識を導き出すこともできる。また、現在沖縄を訪れる台湾人の数は外国人観光客の中でも最も多く（沖縄県公式ホームページより「平成二八年四月入域観光客統計概況」参照）、台湾では近年、松本良孝『八重山の台湾人』（南山舎、二〇〇四）が翻訳刊行され、『八重山の台湾人』台北：行人、二〇一二）、二〇一四年には民視（テレビ局）の歴史教育番組『台湾演義』において「八重山台湾移民血涙史」なる特集が組まれたようだ。沖縄における台湾人観光客の多さは、両地の地理的近さによるところも大きいだろうが、それにしてもこれらの現象は、台湾人が沖縄人に対してある種のシンパシーを抱き続けていることの傍証ではなからうか。

本書はこのように膨大な資料を読者の前に次々と提供しながら、それを多様な視点から解読し、読者を様々な連想へと導かないつつ、台湾・沖縄・日本をめぐる重層的な植民地「関係」を暴き出していくのである。

（やぎ・はるな 東京大学大学院博士課程）

郭沫若研究会報 第十六号

豊かな自然に囲まれた郭沫若の六高留学生生活

—— 岡山の住居に関する再検証

（劉建雲）

『女神』の再認識（上）

（魏建／岩佐昌暉訳）

行書・贈《屈原》表演者二首を巡って

リチャード・トラップルの郭沫若・顧城比較論

（松宮貴之）

目の上のタンコブ（眼中釘）—— 和解へのシグナル

（山田敬三）

「越境する中国文学・百年來の文学交流—— 郭沫若・田漢

日本留学百周年記念国際研究会議 開催報告（藤田梨那）

「虜囚」郭沫若と自由を希求する伯夷

詩劇「孤竹君之二子」をめぐるあれこれ

（杉本達夫）

前口上 わたくしと郭沫若—— 『沫若自伝』を読む（一）

（上野恵司）

郭沫若と李叔同（法名弘一法師）の繋がりについて

（齊藤孝治）

美談には気をつけよう

（成家徹郎）

アジア・アフリカ図書館と郭沫若

—— 今日的意義の観点から（篠原昭雄・佐藤万矢子）

〔B5判 四八頁 日本郭沫若研究会事務局〕

*入手については事務局へお問い合わせください
（☎ 092-715-2554 / japankakuten@gmail.com）